

ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ(SI 構想)

第 1 回・国際芸術・学術拠点構想研究会(A&S 研究会) 議事録

日時:2020 年 4 月 3 日 18:00 - 20:30

会場:早稲田大学 19 号館 713 会議室および Web 会議 (Zoom)

参加: (無印=早稲田会場参加、* 印 Web 参加)

研究会代表: 松岡俊二: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長

研究会副代表: 秋光信佳: 東京大学アイソトープ総合センター教授

研究会メンバー (アルファベット順):

- 安部 良 : 安部良アトリエ一級建築士事務所代表
- 芥川一則 * : 福島高等専門学校教授・学科長・副校長
- 青井哲人 * : 明治大学理工学部教授
- 船曳 淳 * : 三菱総合研究所アライアンス推進室
- 長谷川祐子 : 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授
- 洪 恒夫 * : 東京大学総合研究博物館特任教授
- 宮野 廣 * : 日本本原子力学会・福島第一原子力発電所廃炉検討委員会・委員長
- 森口祐一 * : 東京大学大学院工学系研究科教授
- 永井祐二 * : 早稲田大学環境総合研究センター研究院准教授
- 中嶋聖雄 * : 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授
- 中谷礼仁 * : 早稲田大学理工学術院創造理工学部教授
- 岡田久典 * : (早稲田大学環境総合研究センター上級研究員)
- 小野田弘士 * : 早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授
- 坪倉正治 * : 福島県立医科大学特任教授
- 山本麻紀子 * : アーティスト、京都市立芸術大学構想設計専攻・非常勤講師

オブザーバー: 6 名 (Web 参加アクセス数)

事務局: 早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター

- 李 洸昊 (早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科助教)
- 中野健太郎 (早稲田大学大学院環境エネルギー研究科・博士課程 2 年)
- Yunhee CHOI (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程 4 年)
- 朱 鈺 (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程 3 年)
- 山田美香 (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程 4 年)

司会: 秋光信佳 (研究会副代表、東京大学アイソトープ総合センター教授)

1. 議題

議題1. 研究会メンバー紹介

研究会メンバーが自己紹介を行った。

議題 2. 研究会の背景と目的(配布資料参照)

研究会代表より研究会の背景・目的について、説明を行った。

- ・早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター（以下、RC）を、2017年5月に設置し、長期的・広域的な視点から福島復興の研究を行なっている。
- ・世代・地域・分野を超えて、原子力災害からの福島復興を共に考え、共に議論する場として「ふくしま学（楽）会」を地元のふたば未来学園の高校生や行政、企業、市民組織、大学などの関係者で、半年に一度開催し、これまで5回開催をした。これまでの議論を踏まえて昨年からは、2050年を目標年次とした廃炉産業だけに頼らない自律的な福島浜通り地域の形成を目標とした「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（以下、SI 構想）」を掲げ、調査研究活動を行なっている。そして、第5回ふくしま学（楽）会（2020年1月26日、福島県檜葉町ならは CANVas で開催）において、新しい SI 構想を提案し、その第3の柱として、福島原発事故の教訓を踏まえた国際芸術・学術拠点構想を提唱し、この構想を具体化するために A&S 研究会を発足させることとなった。

- ・SI 構想の第1の柱である、1F 廃炉の先研究会では森口先生や宮野先生にご協力いただき、1F の記憶遺産として活用のあり方などを検討してきた。SI 構想の第2の柱は、安部さんに座長をお願いし、昨年は福島浜通りにおける地域アートのあり方を検討する文化育成ワーキンググループ活動を行い、本年度は、地域の魅力づくりと交流人口・関係人口の拡大を目的として、福島浜通り地域における具体的なアート事業の展開を考えている。

- ・SI 構想の第3の柱である国際芸術・学術（Arts & Sciences）拠点構想は、福島原発事故の教訓をどのように人類社会の新たな知識として遺していくのかを考えたときに、2019年がレオナルド・ダ・ヴィンチ没後500年ということもあり、ダ・ヴィンチに注目したものである。ルネサンスの時代は未分化であったからこそ、アートと科学が一緒になることができたが、その後、この500年の間に社会は発展し、分業が拡大し、今はアートとサイエンスには大きな距離があり、またアートもサイエンスも細分化され過ぎている。原発事故を踏まえて科学技術のあり方を見直し、離れてしまったアートとサイエンスを再び結びつけるような、そのような場、空間があればアートにもサイエンスにも良い刺激になるのではないかと考える。福島原発事故の教訓をどのように形にし、世界に返していくのが重要である。福島原発事故を踏まえて科学技術のあり方を考えたとき、アートとサイエンスとのあり方を問い直すことが一つの重要な問題設定ではないかと考えている。しかし、まだアイディアの段階である。これから研究会での議論を通じ、検討を重ね、アイディアからコンセプトにし、さらにコンセプトからモデルへと構想を具体化させたいと考えている。

議題 3. 講演:長谷川祐子(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授)

「現代アートと新しいエコロジーの関係を考える」

- ・海外作品を中心に国内外の多数の作品を紹介しながら、5つの論点提示をして頂き、研究会のテーマであるアート&サイエンスを考えるコアとなる、「アートとは何か」、「エコロジーとは何か」を考える問題提起を頂いた。

- ・講演のメインテーマの「イメージを通してエコロジーを考える」のイントロダクションでは、フランシス・ベーコンの「人間の自然に対する支配」といった考え方に基づく西欧科学技術から産業革命が起こり、その反動で、ウィリアム・モリスのアーツ・アンド・クラフト運動が起こるといふ、西欧近代科学とアートとの関係を体系的説明し、人類学者ガタリ

(Guattari) の3+1のエコロジー：社会エコロジー、メンタル・エコロジー、環境エコロジー+情報エコロジーが示された。さらに、モノ指向 (object-oriented philosophy) の、ティモシー・モートンの、人間中心でない、西洋的なでないエコロジーが紹介され、「Marco observation」や「Land Art」という作品を解説し、メインテーマに入った。

・ 5つの論点; ① Symbol (メモリアル、象徴、集団的記憶)、② Awareness(視覚化による変化に対する意識、感覚の鍛錬)、③ Hyper visualization (ハイパーオブジェクトの視覚化)、④ Story telling with metaphor (how object/nature talk to human)、⑤ Practical proposal for sustainability を提示し、映像も含めた作品を解説して頂いた。

・ 情報や技術から Cloud という新しいエコロジーが出て来ているが、従来のエコロジーとどのような関係、どういう循環が行われるかを考える時に、絵に描くことで視覚化が可能となり、わかりやすくなる。同じことを文章化すると長くなるが、視覚化することで見える。視覚化することは、手元でシンプルに描け、自分でできる、そういう小さいことから考えることができる。そういうことから、様々な意味で、アートやカルチャーが貢献することができ、また、アーティストもそのようなことを考えているというので、本日の結論とする。

・ 質疑応答

議題 4. 研究会の進め方と今後の予定

4.1 議事録について

研究会議事録については、できるだけ簡単な形で、発言者を特定しない形で作成し、研究会メンバーの確認の上、早稲田大学ふくしま広野リサーチセンターの HP (早稲田大学レジリエンス研究所 HP の中) に掲載することを確認した。

4.2 事務局・予算について

事務局は、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターに置き、研究会の開催費用などは、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター事業 (福島復興知事業など) から支出することを確認した。

4.3 今後の予定

今後の予定については、年末あるいは来年 1 月ごろまでに月 1 回程度の頻度で 7 回程度の研究会を開催する。

第 2 回 A&S 研究会

青井哲人先生 (明治大学理工学部教授) に「福島アトラス」を中心とした報告を依頼。

以上